九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

露土戦争とロシア・ナショナリズム

高田, 和夫
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/2263

出版情報：法政研究. 68 (3), pp.33-53, 2001-12-27. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

露土戦争とロシア・ナショナリズム

高田和夫

一　序――「ロシア的なるもの」をめぐって

ロシアおよびロシア人のアイデンティティを代弁し、それらを時空を超えて結合させるいわゆる「ロシア的なるもの（Russianness）」なる概念は、いくつかのレベルにわたる多様な要素が歴史的に積み重ねられ、それらが影響しあって創り出されたものである。通例、そのような文化的なステレオタイプ化は、人びとが意識するとしないとにかかわらず、何らかの「学習」チャネルによって果たされる場合が多い。近代はそれが公的な制度によっていわば公然と企てられる時代であり、そこでは様々に機能化された諸制度や出来事、シンボルなどによってアイデンティティに内容上の画一化がますます持ち込まれるであろう。このことはロシアについても例外たりえないと思われる。

ここではそれら諸要素のうちから、代表的なもののひとつとして領土ないし領域を取り上げてみよう。ロシア文化史研究の泰斗リハチョーフは「ロシアはそれ自身がみずからの領土の囚われ人である」という。領土的なシンボリズムの表現方法は多様であるが、たとえば、ロシアの国章「双頭の鷲」は、よく知られているように、西のヨーロッパ部と東のアジア部とを強く結合する帝国であることを象徴している。歴史的にみて、これにはいくつかのバリアントがあるが、一八八〇年代に典型的であったのはその中心部（鷲の胴体部）に陸軍に守られた「ロシアの心臓」であるモスクワが位置し、その周りをピョートル大帝期に海軍の庇護者となった聖アンドレイの鎖が取り巻き、さらに中心から遠く、大きく広げられた鷲の翼の上にロシアに征服された周縁諸民族のシンボルが配置される、といったように帝国の三重構造をイメージするものである。つまりこの鷲はロシアを単なる国民国家としてではなく、多民族を束ねて成立する帝国であることを示しているのである。さらに、この三重構造はロシア人の空間認識を表現する標本のひとつでもあって、これらは広大な領土にたいして彼らがいだいていた憧れにも通じる涯しなき広がり（prostranstvo）とそうした空間をしっかりと維持しようとする防御性ないし閉鎖性といった、一見すると矛盾するかのような内容をともなっている。

しかしながら、ロシア人民レベルでの領土・領域感覚は、

無論、はじめからこのように整然とした理解に立脚した空間認識を備えていたわけでは決してないであろう。彼らにとり「母なるロシア」は、たとえ漠然としたものであっても、それはまずは涯しなき広がりをもって存在したであろう。愛唱歌『広き国　わが祖国（Shirokaia Strana Moia Rodina）』はかれらにとり実質的に第二の国歌ともいえるものであった。そして「母なる大地」は人民にとりほとんど抗しがしたい存在であり、決して選べるべくもない対象であったのだが、ロシアにおいても近代ナショナリズムの発現はそれを否応なしに国際関係的なあるいは国際政治的な意味での「領土」概念へと変換させるのにその力を使ったはずであった。そこから始まる「母なるロシア」イメージのいわば改めての周知徹底のプロセスは多分に人為的かつ作為的であったこともやはり否めないであろう。その過程において、近代的な、いわゆる「国民化」がこの国においても追求されたとひとまず仮定することができるであろう。

たとえば、こうした理想化されたホームランドとしての「母なるロシア」のイメージのほとんどが一八七〇年代（以降）に当時の一連の芸術活動によって生みだされ、人びとの間に定着していったことは注目すべき現象であろう。そのひとつ「移動展派（Peredvizhnik）」と称された画家集団の動きは重要である。一八七〇年に発足したこの団体で、クラムスコーイやシーシキンたちは既存の芸術アカデミーの体質を古いものとして斥け、ロシア的なテーマをロシア的手法で描くモットーを掲げて、農村や農家、地方の町、農民の暮らしぶり、彼らのポートレートなどを通してロシア人の眼にロシア的イメージを焼き付け、定着させようと試みたのであった。レーピン『ヴォルガの舟引き人夫』（一八七三年）は彼らの代表的作品のひとつである。それらは単なる写実の域を越えて、鑑賞する人に「ロシア」とは何であるのか、を感じさせ考えさせるものとなった。いってみれば、彼らはロシアに「風景」を発見し、まずそれにロシアの魂（パトリオティズム）を見いだし、さらにそれにナショナルな性格を添付しようとしたといえよう（この点に関しては、志賀重昂『日本風景論』〔一八九四年〕の成立事情が参考になる。彼はまず「日本国土ヲ愛慕スル観念」は「日本ノ山水風土花鳥ノ優美ナルヲ嘆賞スル感情」であるとした）。

時間的にみて、「ロシア的なるもの」にまつわって、人びとがそれにとりわけて歴史的な意味内容を発見し、付加し、確認しはじめたのは、一九世紀後半以降のことである。

たとえば、音楽の分野で「ロシア国民楽派」と評されることになる、ムソルグスキー『ボリス・ゴドゥノフ』（一八六九年初演）やボロジン『イーゴリ公』（一八九〇年）といったオペラは過去の歴史的な支配者をテーマとした。そして、ムソルグスキーは画家レーピンに宛てて「私が描きたいのは、寝たり起きたり、食べたり飲んだりしている人民である。いつも彼らのことが私の心の眼にある」と書いたのである。作曲家チャイコーフスキーの回想によれば、一八六六年四月、元カザン大学生カラコーゾフが企てたツァーリ・アレクサンドル二世暗殺未遂事件の直後にペテルブルクで演じられたグリンカのオペラ『皇帝に捧げた命（イヴァン・スサーニン）』（これはポーランド人によって脅かされていた、ロマノフ朝最初のツァーリを救う話で、初演は一八三六年）の舞台にポーランド人役が登場すると聴衆たちの間に「ポーランド人を倒せ！」の大合唱が起きて公演は中止せざるをえなくなり、代わって国歌が会場全体を揺るがして果てしなく繰り返し歌われる事態が発生したのである。このようにして現象化する「ロシア的なるもの」は、歴史的背景に裏打ちされて、いとも容易に排外的帝国主義的様相を呈するものとなった。現実のロシア帝国はこの時期にその版図を最大限に拡張していたのである。

ここでは露土戦争（一八七七～七八年）に前後する時期にロシア人たちはそうした領土・領域認識をはじめとしていくつかの側面において自らのナショナル・アイデンティティを初めて社会的に確かめる機会を持つ（共有する）ことになったのではないか、という仮説を提示してみたい。ここでの場合もとくに近代的戦争はこの論点を検証するに恰好な材料を提供することになるであろう。しかしながら、この問題群はとてつもなく大きいものだから、当然のことに検討しなくてはならない論点は多岐に渡ることが容易に想像されるのであって、この試論は関連した局面のごく一部をスケッチするノートにすぎないことは予めお断りしておかなくてはならない（本論に関連して末尾参考文献に掲げた拙稿、とくにナショナリズム論と帝国史に関するものをご覧いただきたいが、議論の都合上、そこですでに展開した論点と部分的に重ならざるをえない箇所があることもお断りしておく）。

二　「国民性」論と汎スラブ主義

一般に西欧に比べて「遅れた」国家が近代化するにあたり、「国民的な一体性」をどのように確保すべきか、ある

いは確保したのかといったことは、多くの歴史家にとり関心事項であろう。近代化と「国民的な一体性」の確保とはほとんど同値であるといえなくもないからである。ロシア近代史はそうした一体性の強制的創出を試みる仕掛け人たちの入れ替わりを経験してきたとみることも出来よう。なかでも、「国民的な一体性」を実現するための初期的試みとして十九世紀前半期の国民教育相S・S・ウヴァーロフ（在任一八三四～四九年）が提唱した「国民性」（ナロードナスチ。narodnost'、ふつうnationalityと英訳される）論は有名である。

ナポレオン戦争後の一八一八年までに、彼は普遍的な歴史発展論として、各々の民族は「成熟」することによって初めて神に導かれる自由の「自然な進歩」、道徳的平等と政治的自由との約束をともなうキリスト教を実現することが出来る。「若い」民族は絶対君主の下ではじめて平和裡に「成熟」しうるが、その「成熟」は一定の工業化と民族的文化的アイデンティティの感情をともなうものであるから各国はそれぞれ独自な道をたどって発展するであろう、という確信に達していた。ロシアもそうした「成熟」に至る道に立たなくてはならず、そのためには教育が決定的な役割を果たすであろう、とこの国民教育相は考えたのである。「先進国」をいわば反面教師とみたててそれが体験した革命の苦痛なしにロシアが「成熟」を達成することが彼の夢となった。「我々にはロシアの体制とヨーロッパの教育が必要である」とは彼が好んだ言葉であり、欧米文化の盲目的な模倣や急激な近代化は混乱を結果するのみであるから、なによりも「ゆっくりと発展すること」が望まれた。つまり、ウヴァーロフがめざしたことはツァーリ専制の基本枠組を変えずに近代化を図ることであって、この限りで彼はよく言われたように単なる保守反動などでは決してありえず、むしろ近代ロシアの開明的官僚の元祖とでもいえる位置を占めた。彼にとって進歩なるものは「古いコンセプトと新しいそれとを混ぜ合わせること」であった。

国民教育次官時代の一八三二年、ウヴァーロフはツァーリにあてた報告書において、「正教、専制、国民性」の三位一体が上述の「成熟」を実現するための主たる道具建てであると同時にその達成物であると論じた。ロシア史にあっては前二者は古く、「国民性」は新しいコンセプトである。一八三〇年のヨーロッパ諸革命のあと、ロシアの公衆の一部には混迷し弱体化した西欧よりも、独自な史的特性を有するロシアの方が優れており、未来を約束されているのではないかとする雰囲気が醸成されており、西欧が革

命のない平和的な発展の道を提示しえないのならば、ロシアは独力でそれを開拓しなくてはならないとする使命感が満ちていた。ウヴァーロフの三位一体論はそうした時代の産物であった。「尊厳に満ちたわが皇帝陛下の至高の聖慮によれば、人民の教育は正教、専制、国民性の結合した精神においてなされるべきである」といった表現を彼はしたのである。

ここでは正教や専制に関する議論に触れることはせずに、新しく登場してきた「国民性」なるものに少し立ち入ってみたい。公衆のあいだでこの用語は流行ったのだが、ウヴァーロフがそれに積極的な定義を与えなかったこともあって、誰もが自分に有利なように解釈を試みた。ウヴァーロフの三位一体論は公衆の間にナショナル・アイデンティティのあり方をめぐり一大論争を惹起したともいえよう。これを彼のように文化に引きつけて考えることも出来た。彼はロシアにはいまだ「国民文化」は誕生していない、それを是非とも「上から」産みださなくてはならないと考えたのである。本来、「国民」の基幹となるはずの人民（ナロード）の独創性に期待をかけず（かけることが出来ず）、それを基本的な担い手とはみなさないことで実現しようとする「国民文化」とは一体何であるのか？　こうした根本的問題をいわば回避することで初めて成立した彼の「国民文化」論は、したがって、極めて政策的人為的見地に立脚したものであり、それはロシアの西欧に対する精神的文化的隷属を断ち切る手段としても案出されたのであった。正教、専制というロシア保守主義の二大原理とともに打ち出された「国民性」であったが、その企図したところはこのように明らかに「建設的」でさえあったのである。ウヴァーロフの三位一体論は総体として帝政ロシアの「近代的自立化」を促進するはずのものであった。

しかし、ここで見過ごせないのはその「国民文化」の性格であって、「大ロシア人の文化は民族的分離主義を根絶するほどに魅力的たるべし」という彼の文句が明瞭に示すように、それはロシア至上主義的で排外主義的な色調を濃く帯びるものであった。ロシア語、正教、あるいは学校教育などいくつもの経路によってロシア文化をポーランド、沿バルト海地方、シベリアなどといった各地方の諸民族に供与して（強いて）、帝国としての一体性を実現確保すること、それがロシアを安定した「成熟」へと導く最も確かな方策になるだろうと彼は固く信じていた。少なくともすでにこの時点において「ロシア的なること」は文化的に（も）ナショナルな枠を超えて想定されていたのである。

よく知られているように、ウヴァーロフと同時代の思想家P・Ia・チャアダーエフはその『哲学書簡』（一八三六年）で、農奴制と正教の桎梏にからめとられているロシアは西欧のような発展はせず、そこには未来はないのだと予言して強烈な印象を公衆に与えたのであった。ロシア社会思想史上のこのビック・イベントはその後、この国の進路をめぐる大論争の淵源を提供することになったのだが、ウヴァーロフの主張はこの事態に政策レベルで対応しようとするものであったともいえよう。彼がいう「国民性」は、このあとナショナル・アイデンティティをめぐるやり取りの現場に多様な姿をとって出現することになった。

後に見るように、すでに一九世紀初頭からバルカン半島一帯のスラブ諸民族の間ではオーストリア（以下、単に墺とする）およびトルコ両国の抑圧に対抗して共同戦線を張ろうとする動きが出ていた。西欧諸国はロシアがそれに便乗して当該地一帯で影響力を行使するようになるのを警戒してきたが、クリミア戦争での敗北とドイツとイタリアの統一と抬頭は、ロシアに西欧にたいするスタンスの再検討を強いて、ロシア国内に決定的な作用を及ぼしたのであった。一八五八年には、モスクワ大学歴史学教授M・P・ポゴージンはモスクワで同志たちと『スラブ慈善協会(Slavianskoe blagotvoritel'noe obshchestvo)』を結成した。彼らはロシアが主導してスラブ諸民族の統一をはかる汎スラブ主義の旗を掲げたのである。ポゴージン自身はなによりもロシアの独自性を主張しようとして、「国民性」を真にロシア的で宗教的社会的かつ政治的な徳目によって根拠づけられるメシア的神話をさすものとして理解しようとしていた。「国民性」のメシア的理解はとくに正教を介在させてなされることになるであろう。彼らの思想は夢想の段階を通過し、理想とするものの実現に向かようになったのであり、そこでは思想が現実の試練を受けるはずであった。一八六七年にはモスクワで第一回の汎スラブ会議が開催された。それはロシア側にとって所期の成果を上げるものではなかったが、その余勢をかって『協会』は翌年にはペテルブルクに支部を開設したのであった。

クリミア戦争以前は彼らロシアのスラブ派は他のスラブ諸民族にはほとんど関心を払っていなかったのが実情であった。そしてようやくスラブ派の大立者のひとりIu・F・サマーリンが沿バルト海地方のドイツ人問題を執拗に扱った五巻本『ロシアの辺境（Okrainy Rossii）』（一八六八―七六年）を執筆刊行し、これが七〇年代の『「ロシア化主義者」の教科書』となった事情を考慮すれば、汎スラブ

主義が汎（大）ロシア主義へと転換する環境がこの戦争に前後して登場してきたと考えられるのである。

三　ロシア化政策と汎スラブ主義

さて、政策的にツァーリ・ロシアを帝国ロシアたらしめるのに最も力があったのは、正教、専制、ロシア語の三つであった。正教会や司祭、ツァーリや官僚制統治機構、そして諸民族の学校の場で強制されたロシア語教育などはそれぞれに実態をもって存在し、ロシア帝国内に居住したひとびとの生活全般を統制しようとした。これらに対して、ウヴァーロフのいう「国民性」は曖昧模糊としたものでしかなかった。彼が最も重視した学校教育や言語政策を通じて行おうとしたいわゆるロシア化（Rusifikatsiia, Russification）は、「辺境」へのロシア人の入植・植民活動に付随した経済的なそれや、総督府制度の施行が象徴した政治的行政的なそれとならぶ文化面からのものであった。これら総体がいわゆるロシア化政策である。政府は「辺境」の民一般を「異族人（Inorodtsy）」などと一括してその個性的な存在意義を容易に認知しようとはしなかった。しかしながら、「辺境」において、実際にそこへ入っていったロシア人（農民など）と「現地人」との間にどのような具体的関係が発生したかは別問題であり、関連する近年のいくつかの端緒的な考察は、なかば予想されたように、両者の関係を前者の後者に対する支配的影響力の一方的な行使過程として把握することにたいていは懐疑的であり否定的である。政策一般の運命として政府中央の意向がそのまま実現されることはこの場合もないのであり、政策史によって歴史過程全般を描き理解することなどは、無論、できない相談である。ロシア人の側からする「現地化」（文化的同化など）も観察されて、ロシア帝国周縁部においてはややもするとアナーキーな（換言すれば、自由な）状態が出現しかねない状況が看取されたのである。こうした現象をふくむ、「現地」で発生した諸民族間のいわば「異文化コミュニケーション」の具体相の解明はロシア帝国史研究にとり大きな課題のひとつとなると同時にそれはロシア人のナショナル・アイデンティティのあり方理解に貴重な視角を提供するはずである。

ロシア化政策の展開過程においてややもすると一連の軍事的な弾圧がともなうことになった背景には以上のような事情があることも考慮に入れる必要があろう。不安定な中央＝地方関係が硬軟両方の政策対象になるのはなかば自然

である。しかしながら、この「硬」の側面を代表する軍事的制圧が苛烈を極め、執拗に展開されたことも事実である。いま、その詳細に立ち入るまでもないのだが、例えば、カフカース地方では一九世紀初頭からいわゆる「カフカース戦争」がロシア軍と当地のスンナ派イスラーム教徒との間で繰り返された。その結果、一八六四年には北カフカース全域がロシア帝国に併合された。一方、すでに一八世紀からロシアの影響下に徐々に組み入れられた中央アジアではついに一九世紀後半にはその南部まで軍事的侵略が及び、コーカンド、ブハラ、ヒヴァの三ハーン国とトルクメンが暴力による制圧を受けた。カフカースと同様にここにおいてもロシア人の前面に立ちふさがろうとしたのは、地元ムスリム＝イスラーム教徒たちであった。

一八六五年にロシア軍が中央アジア最大の拠点タシケントを制圧した際に、ペテルブルクで「リベラル・ブルジョアジーと資本主義の代理人」と評されていた新聞『声(Golos)』は、それを「快挙」として社説で次のように書いた。「アジアは寛大な勝利者に慣れてはいない。彼らはわれわれから暴力的な懲罰を受けると覚悟しているのだ。しかしわれわれは彼らに法律をもたらそうとしている。」さらに『声』の通信員は征服を正当化する記事で、ロシアがそこへ文化的なセンスをもたらそうとしていると同様に述べただけでなく、従来、西欧はロシアを精々のところ「半アジア」といった具合に見下してきたのであるが、いまや「ロシアはアジアの啓発者にして、ヨーロッパにおけるスラブ主義の代表者なのである」と宣言した。そして、この新聞はその論調を保って発行部数を一八六三年の創刊時の四〇〇〇部から七七年には二万三〇〇〇部へと大幅に延ばしたのである。

近代ロシアの公衆はこの記事がいうような、ロシア化と汎スラブ主義との二重の使命論を様々な機会に意識し、一部のものはその実現を試みようとした。ここで大切なのは、多くの場合、本来は異質であるはずの両者は違和感なしに結合されてしまったことである。つまり、帝国内部で企てられたロシア化の問題が、西欧との対抗軸（あるいは対抗意識）を介在させることで、容易に（あるいは安易に）外部のスラブ世界と連結されるのである。ここに観察されるロシア人の空間認識は、国民国家の「近代的な国境」によって仕切られたものでは決してない。これは「ロシア・ナショナリズム」のあり方の一大特徴となるはずであるが、この時期にあってこれら使命の実現を邪魔しようとしたのが、繰り返すが、ムスリム＝イスラーム教徒たちなので

あった。乱暴にいえば、北方スウェーデンとの戦争以後、この国にあっては戦争は彼らムスリムたち南方の人びととの戦を意味するようになり、とくにオスマン帝国との間では一七世紀以来、一九世紀中葉のクリミア戦争まで通算して九回も会戦したのであった。それらの戦争は近代ロシアが「民族の歴史」を手にする際に大きな力を発揮したと考えられるのである。

四　ロシアとバルカン

ピョートル大帝期にはじまる黒海沿岸地方への南下政策はバルカンにおける反オスマン帝国運動にたいする支援をともなうものであった。とくにエカテリーナ二世は一七七四年のキュチュク・カイナルジャ条約により黒海沿岸を版図に入れたのであるが、同時にロシアがオスマン帝国内に所在するギリシャ正教教会を代弁し保護する権利を得たことは「東方問題」発生の端緒となってその後の国際関係の展開にとり重大な意味合いを有した。そこでは民族性の承認は民族教会の承認に付随したのである。オスマン帝国内ではその臣民は宗教的帰属により区分されていたが、やがて宗教共同体（ミッレト）は民族的色彩を濃くして、たとえば正教徒は自らをセルビア人とみなしたり、ボスニアのカトリック教徒は同様にクロアチア人意識を持ったりするようになったのである。そして、ムスリムが地主で正教徒やカトリック教徒らキリスト教徒がその領地で過酷な労働を強いられた農民（農奴）というのが経済の基本構造であった。キリスト教徒の間に反ムスリム感情が醸成され、やがて一九世紀後半以降、後者の前者にたいする反乱や蜂起が観察されるようになった。

しかし、当該地帯の近代史の骨格をつくったのは基本的に英・墺・露・土など諸帝国の利害錯綜の諸関係であった。人びとの運命は列強の恣意的行動によって多分に左右されたが、全体的な流れはトルコを除くキリスト教諸帝国によって方向付けられた。このうちロシアに関してだけ簡単に触れると、それに領土的野心を見いだすことはむつかしく、地中海方面での安全保障に関する諸列強との駆け引きを有利に運ぶための外交的関心が第一であったと考えられる。クリミア戦争を締めくくった一八五六年パリ講和条約はトルコに対して国内のキリスト教徒に政治参加を認めるなどの処遇改善を求めるものであったが、それはロシアに当該地域のキリスト教徒の「保護者」役となることを禁じることと同義であった。自ずからロシア側の動きは制約さ

れ、ことに帝国政府はなりふり構わずに汎スラブ主義的行動をとることは出来ずに慎重になった。しかしながら、「民間レベル」ではとくに正教を通してバルカンの諸民族との連絡は途切れることなく続いていた。

たしかに、ロシア人とバルカンの諸民族は相互に交流し関係しようとする歴史を持っていた。たとえば、一八〇六年に露土戦争が勃発すると、セルビアの独立派は「大セルビア国家の建設」でロシアの支援を期待した。ボスニア・ヘルツェゴヴィナからの義勇兵がセルビア軍に加わり、それはブルガリア人、ルーマニア人らとともにロシア軍に参加した。これらの土地からロシアへ移住する者が増え、彼らの存在はロシアの公衆から注目されるようになった。一八二一年からギリシャ革命の遂行を指揮し、民族組織「フィリキ・エテリア」を代表したのはロシア皇帝アレクサンドル一世の幕僚であったイプシランティス将軍であった。一定の国際性をそなえた宗教に民族主義的要素が結合すると、それが拡張的になるのはなかば自然の勢いであり、一片の国際条約などで阻止できるものではなかった。それはこの場合は大セルビア主義であったり、さらには汎スラブ主義であったりした。前者は民族的な統一のためにかつてのセルビア帝国を復興して、ボスニアとヘルツェゴヴィナを解放し、モンテネグロを合併しようとするものである。後者については、ロシアから戻ったセルビア人留学生たちがより巨大なスラブ人国家の形成を煽動しようとしたりしたが、すでに触れた、一八五八年のモスクワでの『スラブ慈善協会』の結成が決定的な力があった。一八六〇年に、汎スラブ主義のイデオローグであるI・アクサーコフがクロアチア、モンテネグロ、ダルマチア、セルビアをめぐる「刺激的な」歴訪をおこなった。その時に、彼はセルビアからボスニアへ避難して将来の蜂起にそなえるハイドゥティ部隊を組織する「セルビア・ボスニア委員会」を設立して名誉会長に就任し、その活動にたいして財政的支援を行った。ここでいう「ハイドゥティ」とは、近年歴史家の注目を改めて引くようになった社会派盗賊のうち集団として正義を働く義賊であるハイドゥクのバルカン版である。ルーマニアのハイドゥティは一八二一年のルーマニア蜂起以前から活発であって、その指導者ヴラディミレスクはロシア軍の傘下にあったルーマニア部隊に参加した人であった。ロシアの汎スラブ主義者たちは一八六二年に起きたボスニア、ヘルツェゴヴィナの対トルコ反乱とモンテネグロの軍事行動を支援し、ブルガリアの解放運動を公然と援助したりした。しかし、ハイドゥティの思想的拠点がそのま

ま汎スラブ主義であったとは考えにくく、ロシア側と彼らとの多層的関係の解明は今後の研究に待つところが多い。いずれにしても、このようにロシアとバルカンはその関係をより実態あるものにしようとしていたことはたしかであった。

五　一八七七-七八年の露土戦争

一八七五年七月、ヘルツェゴヴィナで反トルコ蜂起が発生した。トルコ政府による増税を拒否して農民たちが反乱を起こしたのである。動きはやがて全ヘルツェゴヴィナに広がって、その参加者はすぐに一万人を超えた。セルビアとの統一をめざす「自由統一セルビア協会」などが活動したこともあって、正教徒のあいだにセルビア民族主義支持が広まった。反乱はすぐにボスニアへ波及し、そこではほとんど専らセルビア人が加わった。ベオグラードにミハイロ府主教が指導する蜂起委員会がつくられ、それをセルビア政府が資金援助したから、実質的にセルビア＝トルコ戦争になった。これら蜂起の参加者は全体で二万五〇〇〇人規模になった。トルコ政府は徹底した軍事弾圧策を採用して約三万五〇〇〇人からなる鎮圧軍を投入したが、むしろそれは蜂起側を励ますことになり、各地でトルコ軍は打ち負かされた。この動きはスラブ民族の間に大きな共感を生み出した。八月にモンテネグロが支持を表明した。パリ、ロンドンなどヨーロッパの主要都市では蜂起者を支援するための国際委員会が組織され、各地から義勇兵が直接、当地におもむいて戦闘に参加して、紛争はまさしく国際化した。ロシアの汎スラブ主義者が熱心に支援したのは当然である。義勇兵はロシア、セルビア、クロアチア、モンテネグロといった「スラブ世界」からだけでなく、イタリアなどからもやってきた。

ロシア政府はこの紛争に介入する準備はなく、当面は墺独列強と協調して事態にあたる方針をとった。外相A・M・ゴルチャコーフは軍事作戦に反対してむしろロシアが「精神的影響力」を行使することを主張した。彼はいわば「クリミア情勢」の再現をおそれていた。たしかに当時のロシアはいまだクリミア敗戦の痛手から立ち直れずにおり、前年にプロシャの軍制改革につよく刺激されて陸相D・A・ミリューチンが兵制改革に着手したばかりであった。それは兵役期間を二十五年間から一気に六年に短縮し、予備役の形成をともなう国民皆兵制の導入を根幹とし、リテラシイの修得を徴兵者全員に求めるものであった。修得者

には兵役上の特典が与えられた。それは近代国家にとって必須である、国民軍の創設だけでなく初等教育の普及をもめざすものであった。

しかし、外交的調整に腐心するロシア政府の傍らで、ブルガリア、セルビア、モンテネグロなどで次々とトルコ支配に反抗する民族運動が高揚し拡大をはじめた。一八七六年一月、露墺独の三国は「ベルリン・メモランダム」を締結して国際的な監視体制をとってトルコに圧力を加えるなどした。四月にはさらにブルガリアでトルコに対する農民たちの抵抗運動が発生したが、軍事力が貧弱でとうてい対抗しえず、それは最初から苦戦を強いられた。住民の大半がトルコ系ムスリムでオスマン支配を支持していたことも作用した。トルコ軍による弾圧は苛烈を極め、南部地方だけでも約三万人が殺害されることになった。ロシア政府は対トルコ戦争を真剣に考慮せざるをえないところへと追い込まれた。六月にセルビア・モンテネグロとトルコの間でも戦争が開始されたが、やはり前者は劣勢に立たされた。ロシアはそれを救おうとしてトルコに休戦するように圧力を加えたが、そのためのコンスタンチノープル会議案は実を結ばなかった。諸列強にとってはバルカン半島の秩序維持が第一であった。七月、ロシア政府は墺政府と協定してセルビアに対トルコ戦争を中断させ（敗北させ）、ボスニアとの統一計画を流産させることを強いた。

この間、すでにロシア国内にはある種の熱狂（戦争熱）が生じていた。とくに一八七六年七月に前掲の『スラブ慈善協会』に所属したN・A・キレーエフが義勇兵としておもむいたセルビアで戦死した報が国内に伝わると多数のひとびとが自ら義勇兵になることを志願したのである。八月末から繰り返えされた、ツァーリが主宰したリヴァディアでの審議会はついに十月初めに至ってロシアが独自な軍事行動をとることを決し、将軍ストレートフにブルガリアを支援するための義勇軍の創設を命じた。形式的には無関係をよそおって、実質的な関与をしようというのである。ここでツァーリ政府はセルビアからブルガリアへと主たる支援対象を転換した。七六年十月三〇日、ツァーリは臣民にむけて「我が聖なる使命の遂行」をもとめる勅書を発表した。翌日、動員令が下された。それと同時並行してロシアをふくむ列強はセルビア等へ自治を与えるようトルコ側に働きかける「外交的努力」を継続した。この時点でロシアは硬軟両路線の追求に移行したのである。

一八七七年一月以降、ロシア政府は墺およびルーマニアと協定してロシア軍の移動の自由を確保した。最終的にト

ルコとの戦争を決断するにあたってロシアは特に独墺二国の動向に配慮した。最大のライバルであるイギリスは交渉の枠外にしかいなかった。統一を達成してヨーロッパの一大大国となることが約束されていた若きドイツのビスマルクはロシアに対トルコ戦争に及んだ場合の支援を約束した。一方、N・K・ギルスやA・G・ジョミニといったロシア外務省首脳部は墺に戦時に中立を保たせることに成功した（しかし、その見返りに将来的に墺にボスニアとヘルツェゴヴィナの併合を認め、さらに大きなスラブ国家をバルカンにつくらないことを約束した）。ついに、七七年四月一二日（新暦二四日）に開戦の勅書が出され、そこでツァーリは異教徒トルコに支配されたおなじキリスト教徒を救済することは全ロシア民族の願いであると述べた。つまり、この戦争はなによりも宗教的聖戦であると宣言したのである。五月以降、ルーマニア、ついでセルビアとモンテネグロもロシア側へ参戦した。

すでに触れたように、異教徒＝ムスリムとの戦争は近代ロシア民族史の創造に大きな力を発揮してきたと考えられるが、この仮説が正当であれば、一七世紀以来数えて第一〇次にあたるこの露土戦争をそのようにフレーム・アップしてみせたのは、支配者特有の本能的な知恵とでもいえるものであった。その瞬間に、郷土愛・パトリオティズム・ナショナリズム・汎スラブ主義などは宗教的聖戦というひとつの絶対不可侵的な価値によって束ねられ、方向づけられたのであった。この間の国際関係上の事情に照らせば、この戦争のロシア側の意図について、トルコを打倒してクリミア戦争で喪失したバルカン半島での権威性を回復し、あわせてブルガリアが中心となるバルカン諸民族の団結（「大ブルガリア国家」の建設）をはかって、「海峡」（その自由航行）を確保しようとしたことが指摘されたりするのだが、それは後の者の政策的で「後知恵的な」整理にすぎない。

ロシアにとってこの戦争は、正確に言って、最初の本格的な近代的陸戦となった。徴兵動員による「国民軍」が主力を構成したのである（結局、この戦争で動員されたのは将校四万人弱、兵卒一六二万人余などであった）。ロシア側は二軍、つまり「ドナウ軍」と「カフカース軍」を編成した。この二戦線は度重なる露土戦争にとり伝統的なものである。開戦時の総投入兵力は五三万人といわれる。トルコ軍もそれぞれほぼ同規模の二軍を繰り出したが、それらは英米などから入手した最新兵器で装備していた。六月一〇日（二二日）にロシア軍はドナウ川の渡河を開始し、そ

して三方面軍に再編成されてコンスタンチノーポリをめざして南下を始めたが、決定力に欠けていて、プレヴナの攻略にいたく苦戦し、ようやく翌年一月八日（二〇日）にアドリアノーポリを奪取したのが精一杯であった。より小規模で戦われたカフカース戦線ではロシア軍が西方へ攻め入ってエルゼルムを陥し、黒海沿岸のバトゥーミを攻略したまでであった。合計してロシアは六〇万人を戦闘に参加させて死者三万二〇〇〇人、負傷者七万五〇〇〇人を出したが、その六〇万人のうち四五万人が何らかの病気になり、うち八万人が発疹チフスで死亡したと報告された。この戦争ではロシア軍事史上かつてなかったことだが、戦線はながく幅数百kmにもおよんだ。戦場に投入される火力の破壊力と命中精度の向上はなおさらに戦術的にも臨機応変な散兵線の形成を促すことになった。したがって、戦争遂行上、戦域全体にたいする統制を行う機関としての大本営（Glavnaia Kvartira）の役割が非常に重要になった。そこでの理路整然とした合理的な判断に立脚した指揮が勝敗や優劣を決するのに決定的な役割を演じるようになったのである（この点で、ロシア戦争指導部の能力の低さを指摘する議論がある）。また、とくにドナウ戦線の場合に見られたように兵員や兵器の輸送に鉄道が本格的に利用され、また野戦電信も活用されるなど後方の支援体制も近代化された。

しかし、このノートの主題に照らしてみてより重大な意味を持ったのは、この戦争の過程に観察された右のような近代性とはある意味では一線を画する、いわば「古い」局面である。この戦争を大きく特徴づけたひとつは、既に触れたように、正規の「国民軍」以外の義勇兵（軍）や反乱者たちの参加であり、それらがまずは非近代的な宗教性やパトリオティズムによって動機づけられていたことである。

先述したように一八七六年四月にブルガリア人の蜂起が起きると、何人かのロシア人将軍が自発的に自らが当地へ赴いてセルビア軍の指揮をとってモンテネグロとともにトルコに宣戦するという事態が生じた。その中心にいた人物のひとりがタシケント攻略で勇名をはせていたM・G・チェルニャーエフであった。彼はセルビア国王がスラブ解放のためにバルカン戦争を遂行しようとしているという風聞に時が来るのを待っていたのであった。ロシア国内は彼の企てに熱狂した。ひとびとは政府や軍部の弱腰を非難し、政府はその「無条件中立」を捨てざるをえないところへと追い込まれたのであった。ヨーロッパには墺・英の間にロシアに対抗する秘密条約が存在するという噂が広がり、慎重

なミリューチン自身でさえ戦争準備の必要性を認めざるをえなくなったのである。先掲したI・アクサーコフはチェルニャーエフに「貴君は今やロシアにおいて最も国民大衆と結びついた名前であることを忘れ給うな」と書いた。このチェルニャーエフを代表格として、人民の間ではM・D・スコーベレフなど何人かの「勇気のある」将軍が評判になったのだが、彼らの多くは中央アジアないしカフカースでムスリムと戦って武勲をあげた実績を有し、その勢いに乗ってやはり同じムスリムの軍隊と闘うためにバルカンへ乗り込んでいったのである。ひとびとは宿敵ムスリムと闘うこれら将軍たちの動静に祖国の運命を重ね合わせて見ていたと思われる。当時世評ではスコーベレフなどはナポレオン戦争時の「ロシア救国の英雄」であるA・V・スヴォーロフ将軍やM・I・G・クトゥーゾフ将軍に擬することも流行るほどであった。ここでは、ムスリムを介在して、ごく自然にスラブ世界全体がそのままロシアに代置されて救済の対象とされたのである。

バルカン半島への義勇兵運動は、すでに触れたように、露土開戦以前からいわば自然発生的に起きていた。とくにセルビアがトルコと開戦した七六年六月以降、それは加速度的な進展を示した。最初に義勇軍に参加してきたのは将校や退役兵士たちであったが、農民のなかには正教信仰に殉じて家族を捨てて戦地へ赴く者が出てきた。七六年七月にツァーリが将校が一時ロシアを離れてセルビアへ行くことを正式に認めるまで、ロシアの義勇兵はおそろしいほどの無秩序さをもってバルカンへとなだれ込んだ。その中には単に喰いつめた、およそ汎スラブ主義的な大義とは無縁で、それには「誠実」でない部分さえも相当数含まれていた。たとえば、実際に自らも参戦した作家ウスペンスキーの観察などによれば、義勇兵の大半は、熱心で真正なロシア・ナショナリストの目から見れば、「好ましからざる烏合の衆」といったところであったのが実相に近く、都市下層民がそのほとんどを構成していた。九月中頃、『スラブ慈善協会』を代表して将軍ダンデヴィリがロシア義勇軍の間の混乱を正すためにセルビアへ入り、その後、徐々に義勇軍は正規軍の様相を呈するようになったといわれる。義勇兵の総数は七六年七月～十月の間で数千人規模といわれる。これらのことは一般民衆の間に生じた戦争熱の高さをよく示すものである。

たしかに、人民は開戦勅書などツァーリの呼びかけによく呼応したかのように見えた。ロシア民衆思想史にあってツァーリ崇拝は格別の地位を占め続けてきたが、よく知ら

れているように、それは実存するツァーリと峻別することで初めて成り立つ理想のツァーリ、虚構的なツァーリを追い求めるものであった。しかしながら、ここへきてそうした虚実二つのツァーリ像があたかも合致一体化するかのような幻想をひとびとは抱き始めたのかもしれない。農民たちはなによりも「アンチ・キリストが正教徒を殺そうとしている」、それは何としても阻止しなければならないとして、宗教的聖戦としてこの戦争を圧倒的に支持した。ツァーリにはそのための役割が求められた。先掲したような開戦の勅書は人びとの心を打ったと思われる。ロシアの農民たちは彼らのためにツァーリが直接的な対応をしてくれることをいつも望んできた。彼らにとって、近代的な政治的手続き（政治過程）は、たとえそれが現実に存在したとしても（ロシアは存在しないに等しい状態だったが）、無縁の代物でしかなかった。

ひとびとは列強の外交的協調路線とはこの間一線を画し続けたイギリスの「反露的立場」をよく知っていて、「セヴァストーポリのポグロム」（クリミア戦争）の再現を予感したりもした。さらに「キリスト教徒をムスリムの軛から防衛しようとする戦争であるにもかかわらず、イギリス人とオーストリア人とがロシア人を邪魔している」、「イギリスの邪魔がなかったならば、ロシアはコンスタンチノーポリを取ることが出来るのに……。そして全トルコを打倒できるのに……」といった会話もよくなされた。さらに、フランスについては、それが「一八一二年〔ナポレオン戦争〕の復讐を望んでいる」ともいわれた。当時のひとびとはこの戦争をこのように宗教的にも国際関係的にもとらえてみせたのである。このことは何らかのチャネルで一定の情報が彼らのもとに達していたことをも暗示している。

この戦争ではキリスト教の同志を擁護することがロシア人の民族的団結の自覚や愛国心と重なり会うことになった。露土戦争の勃発はひとびとの間に寄進や義捐行為を流行らせた。『スラブ慈善協会』はブルガリアの四月蜂起を機に募金活動をおこなってほぼ一年間で八一万ルーブリを集めたといわれる。その金はセルビアへの義勇軍派遣、同政府への貸附に使われた。多くの県で貴族や商人・町人だけでなく、農民も寄付をおこなった。慢性的な貧困、不作、不況にかかわらず、とりわけ人民が協力的であった事実には注目しなくてはならない。いくつかの県ではむしろ貴族や商人ら有産階級がそれに消極的であったのにたいして、農民たちは最も積極的であったのである。七七年六月二二日、内務省から各県知事にあてた回状は税の滞納がない農民か

らのみ寄附金を受け付けるように指示したほどであった。ロシア国内で親スラブ熱が最高潮に達したのは、『スラブ慈善協会』が義捐金を集めていた七六年夏ころであったと推定される。その時、人びとの間には政治的信条的な立場を超えてすべてがスラブ人擁護でひとつになるような雰囲気がつよく醸成された。実際に、子供たちが「東方問題ごっこ」で遊び、そのうちの誰もが将軍チェルニャーエフ役をなりたがったのである。作家V・G・コロレンコの言葉を借用すれば、この時に「その向こう側に自己を解放するための展望が見通せるような自由のために、ロシアのナロードの広範な諸階層がひとつになるという幻想」が発生したのである。彼にしたがって言えば、戦争という非日常性は人びとに日頃の精神的束縛を振り解かせ、その本心の発露に道をつけたということである。

六　戦争情報と「国民化」の問題
――結びに代えて

コロレンコがここでいうような大衆的な「幻想」の形成にはリテラシイに代表されるような近代的な情報伝達手段が一定の作用を及ぼしていたと考えられる。繰り返し伝えられる特定なニュアンスをともなう情報は、人びとによって共有されがちである。例えば、右に紹介したような国際関係に関わる事柄について人びとはどのような経路で知識を仕入れたのであろうか。不特定多数の人間が何らかの情報にしたがってある程度定型的な思考をするようになることは、彼らの「国民化」にとって、あるいはそれと相互補完的な意味でナショナリズムの発展のために、重要な環境をつくることになるであろう。

近代ロシアにおいて、リテラシイ修得の場として学校制度の整備は一定の進展をみせた。一八六四年四月に初等国民学校規定が制定されたが、七四年五月の改訂規定が一九一七年革命まで残った。それは郡・県・学区の三段階縦系列の教育行政網で運営されたが、しかしながら全体としてこの公教育制度がリテラシイの普及に果たした役割はかなり限定されたものであった。人民の教育は彼ら自身の事業である、というのが長らくツァーリ政府の伝統的信念になっていたこともあって、学校の運営主体にゼムストヴォや正教会、さらには農村共同体自体があたることも多かったのであるが、より以上に注目すべきはそれらの学校に増して農民自身が主体的自発的にリテラシイ修得のためにつくった「読み書き学校」が盛んであったことである。系統

的にいえば、それらを起点にして公教育の正規学校が発生した場合が非常によく観察された。典型的な「ロシアの学校」であった三年一学級制農村学校のうち「読み書き学校」が占める割合は一九世紀後半期一貫して最大であったのである。無論、これらの学校以外でも教会、軍隊、工場などで彼らはその要求を満たすことは可能であった。したがって、われわれは「意外にも」ロシア農民のあいだに熱心なリテラシイ修得熱を見いだすことになるのである。

今次の露土戦争の時期にようやくではあるが、このリテラシイをはじめとして外部からの情報を受容する手段が少しずつ整備されようとしていたことを確認しよう。ロシアでは昔からルボークといわれた民衆本を主に行商人が村々を販売して回っていたのだが、この戦争時に愛国主義的なものが増加したのはなかば自然であった。しかしながら、新たにロシア人が主導する帝国の地理的一体性と諸民族の協和を訴える内容のものが登場してきたことは見落とせない現象である。これは本論冒頭で触れた「風景論」の文脈でとらえてみたいことでもある。農村では、リテラシイを備えた者は限られていたから、読んでもらうことが流行ったのである。当時、農村でもひろく行われた「人民読書会」(そこではむしろ、スライド映写に人気が集まったのだが)だけでなく、ちょっとした村の寄り合いあるいは村団の会合といった場所がそのためにも使われたのであった。勿論、出稼ぎして町から戻ってくる者が伝える話に農民たちが聞き耳を立てたことは容易に想像できるところである。

ふつう、新聞がロシアの農村に本格的に入りだすのは日露戦争期であるといわれているから、この時期にはそれが見られたとしても端緒的現象として扱った方がよいであろう。都市の下層民を対象にした、いわゆる「リストーク」(小新聞)も農村へ及んでくることは少なかったとみられる。政府が農民に対して情報による動向統制を試みようとして、『政府通報(Pravitel'stvennyi Vestnik)』の付録として週間紙『農村通報(Sel'skii Vestnik)』を発刊したのはツァーリが暗殺された直後の一八八一年九月のことである。

しかし、その一方で、すでに触れたスコーベレフらの世評がかくも高くなることについては、当時、ロシア社会においても「マス・メディア」を通じてひとびとが情報と価値判断を共有するような仕組みがようやく発生してきたことと深く関わっていたように思える。ロシアはこの戦争で初めて戦争特派員を登場させた。V・I・ネミロヴィチ-ダンチェンコを代表格とする彼らは戦場での見聞を記事にし

て送り、新聞各紙は競ってそれを掲載した。いまやロシア人たちは「スラブ諸民族にたいするトルコの暴力」問題を単なる風聞や観念論としてではなく、流血をともなう現実の具体的な殺戮としてはっきりと認識する機会を与えられるようになったのである。出版業者スヴォーリンはこの露土戦争の経緯をその新聞『新時代（Novoe Vremia）』で戦局地図入りで報じることで非常な人気を博し、事業を一大発展させた。スヴォーリンがチェルニャーエフの動静をフォローすることで双方ともに社会的な注目を浴びるといった時代が出現したのである。

したがって、当面、問題とすべきは、とりあえず情報へのアクセスを相対的に多く有し、実際にそれらを咀嚼して価値判断できる都市公衆とそれら双方を十全には持ち合わせない農村農民との、多様な局面に及ぶはずの段差の内容理解であろう。これまでの研究と同時代人の観察はともに農民たちの大半が政治関係などのとくに抽象度が高い新聞用語が理解できなかったことを指摘している。都市の内部においてもそうした段差は存在した。代表的な「リストーク」もののひとつであった『ペテルブルク新聞』では「ロシアはセルビアのためではなく、自分自身のために戦え！」「モスクワ商人はセルビアではなく、ロシアの義勇軍を支援せよ！」といった大ロシア排外主義的な論調が圧倒的であったのであり、これは一般の都市下層民の心情により忠実なものであったと思われるから、この限りで言えば、一部のインテリたちが唱えた汎スラブ主義の大義などは後景に退いてしまっていたのである。いずれにせよ、これら段差に共通する基盤にあったのは、正教的ナショナリズムとでもいえる感情なのであった。

参考文献

（1） Ado, V. I., 'Vystuplenie I. S. Aksakova protiv Berlinskogo kongressa 1878g. i otkliki na nego v Rossii i Bolgarii', Istoriia SSSR, 1962, no. 6.

（2） Bazhova, A. P., Rossiia i Iugoslaviane v kontse XVIII-nachale XIX veka (M., 1996).

（3） Byganov, A. V., 'Otnoshenie krest'ianstva k Russko-Turetskoi voine 1877-1878 godov', Istoriia SSSR, 1987, no. 5.

（4） Fegosov, I. A. i dr. (pod red.), Rossiia i vostochnyi krizis 70-kh godov XIX v. (M., 1981).

（5） Itenberg, B. S., Dvizhenie revoliutsionnogo narodnichestva (M., 1965).

（6） Kersnovskii, A. A., Istoriia Russkoi armii, t. 2 (M.,

1993).
(7) Khevronina, V. M., 'Russko-Turetskaia voina 1877-1878 gg. i obshchestvennoe dvizhenie v Rossii, Voprosy Istorii, 1978, no. 9.
(8) Mal'tseva, F. S., Mastera russkogo peizazha, 1870-e gody (M., 1999).
(9) Orlik, O. V., 'Predstaviteli progressivnoi intelligentsii Rossii——uchastniki Russko-Turetsukoi voiny 1877-1878 godov', Voprosy Istorii, 1978, no. 4.
(10) Polnoe sobranie sochinenii Gleba Uspenskogo, izd. 6-e, t. 5 (SPb, 1908).
(11) Polnoe sobranie sochinenii V. M. Garshina (SPb, 1910).
(12) RAN, Rossiia i Balkany, Iz istorii obshchestvenno-politicheskikh i kul'turnykh sviazei (XVIII v.-1878g.) (M., 1995).
(13) Roginskaia, F. S., Tovarishchestvo Peredvizhnykh khudozhestvennykh vystavok (M., 1989).
(14) Sochineniia I. S. Aksakova, t. 2 (M., 1886).
(15) Tsimbaev, N. I., I. S. Aksakov v obshchestvennoi zhizni poreformennoi Rossii (M., 1978).
(16) Brooks, J., *When Russia Learned to Read; Literacy and Popular Literature, 1861-1917* (Princeton U. P., 1985).
(17) Hellberg-Hirn, E., *Soil and Soul: The Symbolic World of Russianness* (Ashgate, 1998).
(18) McReynolds, L., *The News under Russia's Old Regime* (Princeton U. P., 1991).
(19) Milojkovic-Djuric, *Panslavism and national identity in Russia and in the Balkans 1830-1880: Images of the Self and Others* (N. Y., 1994).
(20) Stavrou, T. G.(ed.), *Art and Culture in Nineteenth-Century Russia* (Indiana U. P., 1983).
(21) Summer, B. H., *Russia and the Balkans 1870-1880* (Oxford, 1937).
(22) Ware, R., 'Some Aspects of the Russian Reading Public in the 1880', *Renaissance and Modern Studies*, 24 (1980).
(23) Whittaker, C. H., *The Origins of Modern Russian Education: An Intellectual Biography of Count Sergei Uvarov, 1786-1855* (Northern Illinois U. P., 1984).
(24) 佐藤清郎『ツルゲーネフの生涯』(筑摩書房′一九七七)。
(25) ジョルジュヴィチ′D・フィッシャー・ガラディ′S・『バルカン近代史』(刀水書房′一九九四)。
(26) 田坂昂編『人民の中へ——ロシア・ナロードニキ運動資料集Ⅰ』(新泉社′一九七六)。
(27) 田坂昂編『テロルと自由——ロシア・ナロードニキ運

動資料集II』（新泉社、一九七六）。

(28) 高田和夫「ロシア帝国史の方法をめぐって」『ロシア史研究』六五、一九九九。

(29) 高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」『比較社会文化』（九大）五、一九九九。

(30) 高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」『法政研究』（九大）六二＝一、一九九五。

(31) 高田和夫他『世紀転換期の世界――帝国主義支配の重層構造』（未来社、一九八九）。

(32) 高野雅之「一九世紀ロシアの保守思想――文部大臣ウヴァーロフと公式国民性」『社会科学討究』（早大）三七＝二、一九九二。

(33) 坂内徳明「ロシア民俗学史における「民衆版画（ルボーク）」」『一橋大学研究年報・人文科学研究』三二、一九九五。

(34) 南塚信吾『アウトローの世界史』（ＮＨＫ出版協会、一九九九）。